

全国伝道推進献金の収入

(円)

	第1巡 (2020年6月25日締め)	第2巡 (2021年12月31日締め)
全国から	2,580,590	3,609,208
米国長老教会から	2,024,324	0
合計	4,604,914	3,609,208

第1巡期間の献金を、各教会・伝道所への指定献金は各教会・伝道所へ、それ以外は各教区に配分しました。

第2巡期間の献金先については、検討中です。

「日本伝道の推進を祈る日」

3巡目が始まります

教会を支える
信徒たちと

石橋秀雄 いしばし ひでお / 日本基督教団総会議長



日本基督教団 伝道推進基本方針	● 祈祷運動 共に祈ろう ● 信徒運動 共に伝えよう ● 献金運動 共に献げよう	「日本基督教団全国伝道推進献金」 振替口座 00140-7-293436

「対立している場合ではない、一致して伝道を」との切実な訴えが上がり、日本基督教団は「伝道推進基本方針」を定め、第3日曜日を「日本伝道の推進を祈る日」としました。2021年12月号までの本誌に各教区（東京は支区）の声を北から掲載し、祈り、伝え、献金を捧げて、2巡目が終わりました。ご協力を感謝いたします。

4月号より、3巡目の取り組みが始まります。祈りの輪が途絶えることなく広がっていることが、日本基督教団の希望です。しかし、17教区内、沖縄教区と京都教区の協力が得られていません。教団の痛みとして受け止めています。両教区内の教会・伝道所のためにも、共に祈りください。

神が働いてくださる良い畑

「日本伝道の推進を祈る日」3巡目は、教会を支える信徒を紹介しながら祈りと献金の輪を広げていくことができましたらと願っています。

1970年、わたしの最初の任地は関東教区埼玉地区の鴻巣教会です。わたしを育ててくれた恩師に「東京神学大学の学長から鴻巣教会を紹介された」と報告しました。恩師は「あそこはつぶれても仕方がない教

への奉仕をしていないのだから、退職金は払わない」と言い、前任牧師は「教会の土地200坪の内60坪は長男の名義になっているから、土地を返せ」と教会を訴えました。そこは本来教会の土地だったので反訴して、泥仕合。わたしが着任した時も、その裁判は続いていました。

このような裁判問題を起こした鴻巣教会は、外から見れば「つぶれても仕方がない荒れ果てた教会」かもしれせん。しかし、鴻巣教会に赴任して感じたことは、ここは「良い畑」だということでした。2人の牧師には怒りを感じました。しかし、「礼拝なしには自分の生活は成り立たない」と考える信徒たちにわたしは育てられました。裁判の弁護士は双方キリスト者です。この弁護士たちによって「土地を200万円で買う」ということで和解が成立しました。

わたしを育ててくれたのは

もう一人。鴻巣教会員の斉藤安三さんは塾を経営していました。塾の生徒や親を片っ端から教会に誘いました。しかし、何回かすると皆来なくなりす。「おかしいな、教会はこんなに楽しいのにどうして来なくなるのか」と言っていました。わたしは早

会だ。2、3年がんばりなさい。そうしたら良い教会を紹介する」とのことでした。

「わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです」（1コリント3・9）。この御言葉に励まされます。ここでは、畑がどのような畑であるかは問われていません。もしかししたら「荒れ果てた畑」であるかもしれません。しかし、神が働いてくださる「神の畑」です。

鴻巣教会は「良い畑」でした。「自分の生活は礼拝なしには成り立たない」という信徒の多い教会でした。鴻巣教会は教会員によって再建された教会です。

1960年代、鴻巣には米の研究では日本一といわれる農林省の農事試験場がありました。ここに富田豊雄さんという人が赴任してきました。鴻巣駅を降りて試験場の官舎に向かう途中に鴻巣教会があります。着任の日、富田さんはそれに気づき、喜びました。「ここに教会がある」と。

次の日曜日、鴻巣教会に行きました。ところが、管理人がいるだけで礼拝はなく、開店休業の教会でした。牧師は高齢、電車で約1時間のところに家があり、教会の奉仕ができない状態でした。富田さんは涙を

口です。徹夜で準備したレポート用紙1枚の説教原稿を、15分で読み上げます。この説教が中心の礼拝が楽しいと言っています。楽しいはずがないのに、斉藤さんは楽しいと言っています。

2月の寒い日曜日、ストーブのそばに座り、「足がこんなにむくんでしまったよ」とさすりながら見せてくれました。ドキッとしました。その日、5分の距離を自転車に寄り掛かり、休み休み礼拝にきました。30分かかったそうです。礼拝には遅れませんでした。斉藤さんは、その週の水曜日に召されました。礼拝の重みを斉藤さんに教えられました。死を意識する中、とても教会まで来ることできない体で、礼拝に来たのです。礼拝が楽しいからです。このような信徒たちにわたしは育てられました。

それぞれの教会に、教会を支え続ける信徒たちがいます。牧師は転任します。しかし、その教会を支え続ける信徒たち、消滅の危機にあっても喜びをもって礼拝を捧げ、教会を支え続ける信徒たちがいます。

その方々を紹介しながら、3巡目の「日本伝道の推進を祈る日」の祈りと献金の輪を、日本基督教団で広げていきたいのです。